

◇日神の天照大御神／ヒミコの一生〔歌詞（二〜十一）〕

（日神の天照大御神／ヒミコ 向津姫、稚日女、天照らす大日靈、巖之御魂天疎向津姫）

一、光武帝 建国の頃（二五年） 天地なる倭奴の国 怡土（糸島市井原）に生れます

数えて六世（一七〇年代） 天神（六代天神・天之尾羽張）の日嗣の御子 幼き向津姫は 日隈

（熊野家、日前、日前）の伊奘諾に養女として預けられた

養父（伊奘諾）と共に 黄金色した（七頭立ての）馬車に乗って 天空を駆け巡り 倭の国の
西から東をくまなく巡った

☆バラモン神の教え、「天界、空界、大地にはそれぞれの神がいる。天界の日神（男神）は、生まれながらに空界と大地の神々を支配し、衆生の行動を絶えず見守っている。日神の一日は多忙だ。

夜が明けると、若い女神と共に黄金の七頭立て馬車に乗って天空を駆けめぐり、人々を起こしては仕事に就かせ、夕べになると眠りに誘い、死者があればその靈魂を天に引き上げる。月神は日神に対して、陰と陽、あるいは月と日の関係のごとく寄り添って仕える。

火神は空界にあつて、神々の中で最も賢い神であり、太陽・雷光・火などを使って宗教儀式を行う。

二、天神 臣伊奘諾に 詔して曰わく 東の方に

豊葦原の 千五百秋瑞徳国あり 早く往きて脩すべし とのたまいて即ち瓊矛を手渡して授く

時が流れて 向津姫に婿が決まった 名は月読命(月の神) 大穴牟遲、御饌津神、熊野櫛御氣野

牛頭ゴウクマ(牛頭天王)

養子の婿は 皇太子(豊受皇太神)に担がれるや 東に副都(奈良盆地の唐古)を置き 豊葦

原瑞穂国をみごと蘇らせた(一八〇年前後、大乱の前)

「伊邪那伎記」、「天津神、伊邪那岐命・伊邪那美命の二柱に、『この漂える国を修め理り固め

成せ』と詔りて、天の沼矛(瓊矛)を賜いて、言依さしたまいき」

「伊奘諾紀」、「天神、伊奘諾尊・伊奘冉尊に謂りて曰わく、『豊葦原の千五百秋の瑞穂の地

あり。汝往きて脩すべし』とのたまいて、すなわち天瓊矛を賜う」

三、黄こうの天あま將まさに立つべし(一八四年) 太子親子(豊受皇太神/天鹿兒山(天羽羽))と三輪才

口チ 組みて謀反す

皇太神は 黄泉国の決戦に勝つや (奈良盆地の)纏向に都して 邪馬台やまと(瑞穂の国、水火の国、

小蛇三輪氏の担ぐ嚴之國王朝)の水天神 天照大神あまてらすおおかみ(またの名は、天叢雲)に立つ

天璽あまつしるし(天神の印し)の 叢雲むらくもの劍(水天神の印し、草叢くさむらの劍)を戴き 斑毛かちげの天馬てんま(天の斑馬、

鶴斑毛の神馬、まだら毛の白馬)に乗って 東西の国々を颯はやてのごとく駆け巡った

☆天照大神の児・天鹿兒山(天羽羽)も、天鹿兒弓・羽羽矢を天璽として火天神に立った。

☆天照大神親子は、大蛇オロチと呼ばれた↓高志こし(越)の八俣やまた(邪馬台)の大蛇。

☆天照大神は、大穴持、神皇産霊、佐太大神、大国主、国常立、御饌津神、月神、月読命、天照皇太神、天叢雲、豊受大神、天御中主、牛頭天王の名も合わせ持った。高千穂宮では、高皇産霊や経津主とも語った。

四、大乱後 日嗣の御子（向津姫）は 高千穂の郷に遷座し 天^{あめ}之^の国とす（一八〇年代後半）

高^{たかまの}天（日高と天之国）原^{はら}を 天^{あめ}の都（天上の都、高千穂宮）と見立てつつ 天^{あまてらす}照^す大^{おお}御^{のみ}神^{かみ} つい

で日^に神^{にっしん}（日の天神）に昇り、八咫鏡を御璽（天璽）とす

素戔嗚主^ひ従 肥^ひの川上に忍び入って（高^{こし}志^の）八^や俣^{また}の大^{おお}蛇^{とち}（天照大神（天叢雲）／天羽羽）

を斬り 豊葦原中つ国の再興に駆け回った（一九〇年代前半）

『古語拾遺』、「思金神の 議^{はかりごと} に従^いいて石凝姥神^{いしこりどめ}をして日の像^{かた}の鏡^をを^い鑄^いしむ。初^は度^{はじめ}に^い鑄^いたるは、

少^{いささか}意^{いごころ}に合^あわず。「是、紀伊国^{ひのくま}の日前^{つぎ}神^{なり}なり」次^{つぎ}度に^い鑄^いたるは、その形^{うろわ}美^う麗^わし。「是、伊勢^{おお}大^お神^{かみ}

なり」、

「天^と十^{つか}握^{つか}劍^{けん}（その名は天^{あめ}羽^{のは}々^は斬^きりという。古語^{おろち}に大^は蛇^はを^い羽^は々^は）を^いて八^は俣^は大^は蛇^はを^い斬^きりたまう」

☆素戔嗚も、熊野櫛御氣野、牛頭天王、大国主と語った。邪馬台国では、兵主、大兵主、天

王^みの位^ゐに昇^{のぼ}った。

五、彼の御子 大^{おお}己^{おの}貴^{むち}（素戔嗚の兄・八嶋手、佐太国^いの猿^い太^い彦^いと交換）が 葦^い原^い中^いつ国^いを^い率^いて

邪^や馬^ま台^とを^い攻^いめ^たた

婿^{むこ}の大^お神^{かみ} 日^ひの高^{たか}皇^み産^{むす}霊^びと語^かつて 高^{たか}千^ち穂^ほの妻^めと会^あい 刃^{やいば}に血^ちを^い塗^ぬら^ずに大^お己^{おの}貴^{むち}を^い降^{くだ}ら^せた

日神ひたまたま曰いう 「八百万やちまんにの神を率い 皇孫みまろを奉たてまつれ」 天孫あまのが降くだった後あと（火瓊瓊杵ひろろろこ↓薩摩吾田さつまごたに降臨くだり、天火明あまのひら↓大倭おほに降臨くだり）、東あづまの邪馬台よまたいへ旅立たびだった

『古事記』、「大國主、武甕槌に答えて白ししく、「僕あが子等の白す随まじまに、僕あは違ちがわじ。葦原中つ国は、天つ神の御子の随に献らむ」

☆忍穂耳の御子・瓊瓊杵は火天神の家に籍入れて火瓊瓊杵と語り、八咫鏡・草叢劍・日矛・天璽の天羽羽矢を携えながら降臨した。

『日本書紀』、「高皇産靈尊、（天津彦国照彦火瓊瓊杵を）降し奉る。時に、大伴連の遠祖天忍日尊、．．手には天楯弓あまのたてゆみ・天羽羽矢を捉り．．天孫あまのの前に立ちて遊あそび降来りて、

☆天羽羽矢は、火天神の御子の印し。当然、火天神の実子・天火明もこれを所持したはず。

これは、両家の後継に引き継がれた。火瓊瓊杵↓火火出見↓磐余彦 天火明↓火明饒速日☆天孫の降臨後、高皇産靈は丹後宮津経由で天火明・大己貴を従えながら、纏向に戻った。ついで、日神が高千穂宮を発って出雲に立ち寄り、素戔嗚一族も連れて纏向に向かった。

六、魏の初め（二二〇年代前半） 夫がみまかった 妻は上之宮かみのみや（卷向駅北）に遷り 女王に昇つた

夫婿ふせいを入れず 夫（天照大神）を高皇産靈として 齋まつく奉たつた 世人は ヒミコ（日の巫女）、

（天照らす） 大日靈、天疎あまさかるむかつ向津姫と呼んだ

鬼道に仕え 老いてよく衆を惑わし 侍女千を侍らせた 素戔嗚が卿となり、蛭子ひこ（天之事代主、邪馬台国に人質にとられた伊奘諾の嫡子）は詞ことばを取りもつた

☆女王即位の年齢は、五十歳代後半。上之宮は、卷向駅の北、箸墓古墳北の上ツ道沿い。

七、倭の女王 天の火明 火瓊瓊杵の児を互いに 入れ替えんとす

先ず火火出見（天孫火明の児、山幸彦）が 熊襲に天降って行ったが 日向に居座っていた

火照（天孫火瓊瓊杵の児、海幸彦）と仲たがいし、三年間もめ続けた

負けた火照は、誓った「僕は、今より後は 昼夜、汝命の 守護人になりきって仕えるから

許してくれ」（海幸彦と山幸彦の争いは、二四〇年前後）

八、倭の女王 太夫難升米を（帯方）郡に遣り 臺（天子の政の御殿）に詣出る朝献を請う

遣いの太夫 景初の二年（二三八年）の十二月に 京都（洛陽）にたどり着くや 神仙薬、薬

酒を献じて魏帝に見えた
明帝曰く、「汝 親魏倭王となす 金印紫綬をあたえ 五尺刀二、銅鏡百枚も録受せしめん」

☆魏帝鏡は、中国の考古学者・徐華芳氏が説くごとく、後漢鏡に限られる。

☆方格規矩鏡に相違なかるう。

九、倭の女王 狗奴国（日隈、熊襲）の王 ヒミココ（皇孫、火瓊瓊杵）と素より和せず 相攻
撃す

魏史張政が 勅書・黄幢を奉じて 和議に至らしめると 火明（天孫天火明）を追い払い、海

幸彦（火瓊瓊杵の児、火照、火明）に代えんとす（二四〇年代後半）

磐船に乗り 虚空見つ天降った御子は（火明）饒速日と語るや 日本（日本の倭）の国を興

し、自ら天神（天照国照彦火明饒速日）に昇った

「神武紀」、「饒速日、天磐船に乗って大空を巡り行きこの郷くにに天降った。よって『空見そらみつ日本やまとの国』という」

【鏡作神社（鏡作坐天照御魂神社）】（田原本町）、祭壇中央に天照国照彦火明命を祀り、左右に石凝姥と天兒屋を配して外区のない鏡を御神体として祀る。

社伝によると、「崇神天皇六年九月三日、この地において日御像の八咫鏡を鑄造し、天照大神之御魂となす。今の内侍所の神鏡是なり。本社は其の（試鑄せられた）日像鏡を天照国照彦火明命として祀った」という。

☆この鏡は、紛れもない三角縁神獸鏡（唐草文帯三神二獸鏡）だ。

十、倭の女王 夫の鎮まり 座まさせむ処を求めて 纏ま向を發つ（二四七、八年）

倭姫やまとらと 伊勢の国を巡り歩き 五十鈴川の上ほとり（内宮の地）に 磯宮いそのを築いて夫の再来を祈願す

その願ねがい事 ついに天あめに届いた 故 「天照大神の 始はじめて天あめより降ります処なり」とされた

☆不死身となった黄帝は、崑崙山に莊嚴華麗な地上の帝都を設け、仕事の合間をみては天上から天降あめつてきて浮世の仙人らと神仙遊あそびにふけていたという。

十一、ヒミコ死し 大塚残る 径百余歩の箸墓が その墓らしい（円墳は二五〇年頃の築造）

辛酉しんゆう（三〇一年元旦）の春 饒速日を打ちのめした 磐余彦火火出見（祖父の火火出見を襲名、

神武）は 橿原に都して大和朝廷を開いた

四年二月 鳥見山とみの祭りの時にわ（桜井茶臼山古墳）に 皇祖みおや（日神と高皇産靈）の靈を移し 天神あまつかみ

に配して皇祖と皇宗に郊祭まつった（三〇四年二月二十三日）

☆魏の一步は、約一・五里。従つて、箸墓古墳の円墳径一五七里は、百余歩に相当する。

☆ヒミコの享年↓八十余 箸墓の円墳上にあつた特殊壺↓三世紀中頃に造られた吉備系土器
一方、方墳南端にあつた二重口縁壺は三〇〇年頃の吉備系土器

「神武記」、「ここに饒速日命参赴きて、天つ神の御子に白ししく、『天つ神の御子、天降りま
しつと聞けり。故、追いて参降まいたり来つ』ともおして、すなわち天津瑞あまつしろひを献りて仕え奉りき」

「神武紀」、「長髓彦、饒速日命の天羽羽矢一隻及び步鞞を取りて、天皇に示せ奉る。天皇、
覽して曰わく、『事不虚なりけり』とのたまいて、還りて所御の天羽羽矢一隻及び步鞞を以て、
長スネ彦に賜示う、」

「我が皇祖の靈、天より降りみて、わが身を光し助けたまえり。今、諸の虜すでに平むけて海内あめのした
事無し。以て天神を郊祀りて、用て大孝（皇天にしたがうこと）を申べたまうべし、」

「まつりのにわ靈時を鳥見山の中に立てて、皇祖天神を祭りたまう」

『古語拾遺』、「上帝（五帝）を類り、六宗を禋り、山河を望り、群神を偏りたまう。然れば、
天照大神（日神と高皇産靈）はこれ祖これ宗、尊きことならび無し」

☆桜井茶白山古墳の方形壇の縁に並ぶ二重口縁壺形埴輪↓三〇〇年頃に造られた吉備系土器
箸墓の円墳に眠るヒミコの亡骸↓四世紀初めに桜井茶白山古墳に移し祀られたらしい。

☆結局、山幸彦の孫・磐余彦は、海幸彦の児・可美真手を軍事筆頭職の物部氏に取り立て、火
火出見との誓約を履行させたのである。磐余彦火火出見という名がこのことを教えている。

☆天照大（御）神、稚日女、熊野櫛御氣野、饒速日、火明は、いずれも二人が存在。